

論文の要旨

<p>ふりがな 氏名</p>	<p>こうごう 顧 宇豪</p>
<p>論文題目</p>	<p>陽成院関係歌合の研究</p>
<p>論文の要旨</p> <p><b>研究目的：</b>本研究は、陽成院（貞観十年（八六九）～天曆三年（九四九）、在位貞観十八年（八七六）～元慶八年（八八四））の名を冠する四つの歌合（「陽成院歌合（夏虫恋）」・「陽成院歌合（惜秋意）」・「陽成院親王二人歌合」・「陽成院一宮姫君歌合」）を研究対象とする。以上の四つの歌合は、萩谷朴氏の『平安朝歌合大成』に収録されているものの、本文の不備が存在しながら深く言及されることがなく、注釈書の類でも論じられたことが少ない。数少ない先行研究も個別の歌合について論じるのみで、四つの陽成院関係歌合を総合的に捉えた研究は存在しない。しかし、これら四つの歌合は、いまだ不明な点の多い平安時代中期の和歌及び歌合の実態を解明していく上で無視できない作品群である。このため、本論文はこの四つの歌合を研究対象とし、陽成院関係歌合の特徴と和歌史における位置を探求することを目的とする。</p> <p><b>研究方法：</b>第一部を「陽成院歌合（夏虫恋）」、第二部を「陽成院歌合（夏虫恋）」、第三部を「陽成院親王二人歌合」、第四部を「陽成院一宮姫君歌合」の研究に当て、各部においてはまず四つの歌合の本文について検討する。各歌合の本文を記載した文献資料を蒐集し、翻刻・校異を行い、校訂本文を作成する。次に、各歌合の成立事情について考察する。成立事情は十卷本冒頭仮名記に拠らざるを得ないが、先行研究では冒頭仮名記の解釈に誤りが見られる。冒頭仮名記を再検討することを通して、各歌合の成立事情を再確認する。続いて、各歌合の歌の表現について調査し、一部の歌の解釈について重点的に考察する。最後に、四つの歌合を比較し、陽成院関係歌合の発展過程とそれぞれの特色を検討する。</p> <p><b>内容概要：</b>第一部では、「陽成院歌合（夏虫恋）」について考察する。第一章では、「夏虫恋」の本文について、十卷本系統の尊経閣蔵本の部分と宮内庁書陵部本、廿卷本系統の柏木・二条切を翻刻し、異同を確認した上で、校訂本文を作成する。</p> <p>第二章では、まず「夏虫恋」の成立時期を再検討する。先行論で述べられてきた『伊勢集』における「夏虫」を詠む歌と「夏虫恋」の関連性は『伊勢集』の諸本の本文が矛盾しているため憶測的であり、『伊勢集』によって導き出された延喜十二年夏という『大成』を中心に説く成立時期を否定せざるを得ない。そして、同時代の「夏虫」について歌語として用例を考察すると、「夏虫恋」における「夏虫」の詠み方は基本的に『古今和歌集』五四四番歌に従い、蛾を詠んでいることがわかる。また、同時代の歌合の歌題を整理し、「夏虫恋」という歌題、及び「惜秋意」と「親王歌合」の「寝覚めの恋」・「暁の別れの恋」といった陽成院関係歌合の歌題は同時代では非常に特殊であることを指摘する。</p> <p>第三章では、まず「夏虫恋」における表現について考察する。「夏虫恋」における恋歌表現は基本的に『古今和歌集』五四四番歌に基づいて、蛾の行動を指す「投火」と人の恋に対する情熱を表す「捨て身」という二つになっている。そして、「夏虫恋」の歌のパターンを整理し、「離れない思い」・「夏虫との比較」・「思いの強さ」・「夏虫になる」・「思いのほか」・「結末」・「頼む思い」という七つに分類する。また、『伊勢集』における「夏虫」を詠む歌を詳しく検討し、内容的にも「夏虫恋」の歌と異なっていることを明らかにする。</p>	

第二部では、「陽成院歌合（惜秋意）」について考察する。第四章では、「惜秋意」の本文について、独自系統の肥前島原松平文庫本を翻刻し、異同を確認した上で、校訂本文を作成する。

第五章では、「惜秋意」における『古今和歌集』周辺先行歌の撰取について詳しく分析する。『古今和歌集』周辺の先行歌撰取は「惜秋意」の基盤となっていることを明らかにし、そこから習作的な性質が窺えることを述べる。また、黄一丁氏が説く「惜秋意」における漢詩文撰取について検討する。字面的に類似する表現でも和歌と漢詩文のニュアンスの違いが存在するため、直接的な撰取関係は到底認めることができない。

第六章では、「惜秋意」における恋歌的表現について考察する。季節の過ぎ去ることを惜しむ歌に恋歌的表現を加えるという発想は当時ではまだ普及しておらず、「惜秋意」のこうした工夫から陽成院グループの恋歌に対する関心を瞥見する。

第七章では「惜秋意」の二番歌、第八章では「惜秋意」の一三番歌という二つの難解歌の解釈について詳しく検討する。この二首の歌は特定の表現によって歌の意味が多方向になってしまい、歌の味わいが深まると同時に晦渋になる。そこから「惜秋意」は表現を大胆に用いて実験的に歌を詠む場であったと推測する。

第三部では「陽成院親王二人歌合」について考察する。第九章では「親王歌合」の本文について、十卷本系統の尊経閣蔵本、廿卷本系統の陽明文庫本と古筆の唐草本を翻刻する。そして、十卷本系統と廿卷本系統の本文異同を詳しく分析する。結果として両系統の本文は優劣を判断できず、従来十卷本が重んじられていたが、廿卷本も参考価値が十分あると考える。

第十章では、「親王歌合」の成立事情について、元良・元平親王二人のみによる開催という従来の論説を再検討する。結果として、「親王歌合」は陽成院が両親王を左右の頭に命じた形で開催した可能性が高いと考える。

第十一章では、まず「親王歌合」における先行歌撰取について考察する。「夏虫恋」・「惜秋意」を受け継ぎ、「親王歌合」においても『古今和歌集』周辺先行歌の撰取が見られるが、その撰取の技術が一層進歩したとわかる。また、その他の陽成院関係歌合の歌の表現との共通点を考察する。

第四部では、「陽成院一宮姫君歌合」について考察する。第十二章では、「姫君歌合」の本文について、十卷本系統の書陵部本・陽明文庫本と廿卷本系統の陽明文庫本を翻刻し、異同を確認した上で、本文を作成する。

第十三章では、「姫君歌合」の返歌合としての意義について検討する。まず、返歌合の先駆けに当たる「京極御息所歌合」について分析し、「京極御息所歌合」における本歌と返歌は、贈答歌の関係よりも、句題と句題詠の関係の方が近いことを指摘する。そして、「姫君歌合」を詳しく分析する。「京極御息所歌合」と比べて、「姫君歌合」における本歌と返歌の関係は、一層句題と句題詠に近いと考える。そこから、「姫君歌合」は姫君に和歌の教育を施す目的を込めていた習作的なものだと推測する。そして、歌合内部において表現の連動が見られ、その開催状況は即座的・漫然的であることも判明する。

第十四章では「姫君歌合」における陽成院関係歌合からの継承を考察する。成立事情において、「姫君歌合」は行事のある日に身内で行う小規模な歌合という基本スタンスを継承する。また、歌の表現において、「姫君歌合」はその他の陽成院関係歌合で見られる特徴的な表現を受け継いでいることがわかる。そして、歌の修辞技法において、「姫君歌合」は他の陽成院関係歌合と共通して巧妙な掛詞を使用していることが確認される。

備考 要旨は、日本語 4,000 字以内又は英語 1,500 ワード以内とする。